



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4515 号 2018.7.28 発行

### 終活語らう「お寺カフェ」 日常の尊さ気づく 大阪・應典院が始める



産経新聞 2018年7月28日  
第1回おてら終活カフェで、ゲストのおちあやこさん（手前）と住職らのトークを聞く参加者ら＝17日午前、大阪市天王寺区の應典院

寺院でお茶を飲みながら、「人生のしまい」について考える。大阪市天王寺区の應典院（おうてんいん）が今月から「おてら終活カフェ」を始めた。高齢社会で昨今ブームとなる「終活」だが、具体的に何をすればいいの

か。ともに考えようと開いたカフェは、参加者らが自分の「死」に思いをはせ、何げない日常の尊さに気づく場となっている。（浜川太一）

「今日はあなたのお葬式です。あなたは自分のひつぎに何をに入れてほしいですか」

17日に開かれた第1回終活カフェ。集まった約30人の参加者は、目を閉じ、2分間静かに考える。「主人の写真」「3人の子供のへその緒」。参加者の答えは、家族や大切な人とともに生きた証しを示すもの。お金で手に入る物品ではない。

「死を前にしたとき、人が本当に残したいと思うのは、大切な人と過ごした時間や思い出。人生の終（しゅう）焉（えん）を考えると、自分にとって本当に大事なことが見えてくる」。カフェにゲストとして参加した、タレントで、終活カウンセラーの資格を持つ、おちあやこさん（41）が説明した。

終活カフェを企画したのは、同院職員の齋藤佳津子さん（51）と繁沢邦明さん（30）。「死」を扱ってきた「寺という場の安心感」（繁沢さん）の中で、市民と僧侶が膝を交える機会を作るのは「寺の使命であり、時代の要請」と、2人は口をそろえる。

カフェでは、自宅の片付け術▽生前契約▽相続手続きーなど、終活にまつわる具体的なテーマを毎回1つ設定し、専門のゲストが講演。その後、参加者同士がお茶を飲みながら、自由に語り合う形式だ。

第1回に参加した50代女性は「死を考えるのは怖くて避けてきたが、死を通じて、家族や友人に囲まれて今を生きているありがたさに気づけた」。トルコから文化人類学の研究で来日した大学生のセリムさん（28）は、「寺で死を考えるのは日本ならではの。参加者の闘病体験を聞き、日本人の死に対する考えが知れてよかった」と話した。

「命は円環にめぐる」という仏教的価値観からすれば、「終活」という言葉には「違和感もある」と齋藤さん。「カフェを通じ、参加者とともに、終活に変わる新しい言葉も探してみたい」と意気込んでいる。

「おてら終活カフェ」は毎月1回開催、参加無料。次回は8月3日午後2時から。テーマは「生前契約について」。申し込み、問い合わせは同院（電）06・6771・7641）。

### 精神障害者の職場定着目指し「就労パスポート」整備へ 朝日新聞 2018年7月28日

厚生労働省は27日、障害者の雇用促進制度に関する研究会の報告書を取りまとめた。精神障害者の職場への定着を図るため、障害の特性などの情報を企業や支援関係者で共有する「就労パスポート」の仕組みを作ることを盛り込んだ。秋にも労使や支援者による検討会を立ち上げ、具体化の議論を始める。

精神障害は外見ではわかりづらく、偏見も根強いいため、企業側に伝えずに就職する人も少なくない。その結果、適切な支援が得られずに離職に至りやすいことが問題となっている。就労パスポートで情報共有の仕組みを作り、支援を受けやすくするのが狙いだ。

報告書にはほかに、障害者の雇用者数が法定雇用率（2・2％）に満たない場合の納付金支払い義務について、現在の従業員100人超から50人規模以上に対象企業を拡大する案も入った。

### 発達障害、切れ目なく支援 佐賀市で検討委発足 市に助言 佐賀新聞 2018年7月28日

会長に就任した松尾教授（右）と、副会長の古賀保健監＝佐賀市役所



佐賀市発達障がい者トータルライフ支援検討委員会が26日夜、発足した。発達障害者を乳幼児期から人生の各段階に応じて切れ目なく支援していく方策を話し合い、年内に提言をまとめ、市に助言する。

医療、保健、福祉、教育、就労、家族会などさまざまな立場の委員22人で構成し、会長に佐賀大学医学部の松尾宗明教授＝小児科学＝を、副会長に佐賀中部保健福祉事務所の古賀義孝保健監を選出した。

初会合の冒頭、秀島敏行市長が委嘱状を手渡し、「いわゆる“気になる”子どもたち、発達障害が増えている。この問題は根深く、対応の難しさがあるが、一人一人の特性を生かせる佐賀市にしたい」と協力を求めた。

この日は先進地の事例と比較しながら、佐賀市が抱える課題を共有した。「グレーゾーンを対象とした療育支援を行っていない」「中学卒業後の情報の引き継ぎは十分ではなく、支援が途切れる」などの課題が挙げられた。委員からは「ワンストップで親子を見守ってほしい」「個人情報の問題があって、継続的な支援が難しい」などの意見が出ていた。次回は11月中旬に開く。

### 特別支援学校生160人懸命プレー 札幌でフットサル大会



北海道新聞 2018年7月28日  
懸命のプレーで会場を沸かせた選手たち

道内の特別支援学校の生徒が競う「第2回小野寺真悟杯フットサル大会」が27日、札幌市内で開かれた。札幌市や函館市、根室管内中標津町など26校から中学2年～高校3年の男女合わせて約160人が出場し、懸命のプレーを見せた。

札幌市の社会福祉法人「明日佳」や、フットサルFリーグ「エスポラーダ北海道」の運営団体で理事長を務める小野寺真悟さん（78）が設立した障害者スポーツ振興団体の主催で、昨年からはじまった。

### 20年鹿児島国体・障害者スポ 白薩摩の参加章とメダル決まる



南日本新聞 2018年7月28日  
全国障害者スポーツ大会の金メダル。右下の三角形が桜島の火山灰

2020年鹿児島国体・かごしま大会（全国障害者スポーツ大会）の実行委員会は27日、メダルと、両大会の選手や役員らに贈る参加章を発表した。

メダルは国体には授与がないため、全国障害者スポーツ大会のみ。八角形（一辺2センチ）の合金製で、県花ミヤマキリシマの図柄や大島紬の龍郷柄、圧縮加工した

桜島の火山灰などを組み合わせ、鹿児島らしいデザインになっている。

白薩摩を使った参加章

参加章は直径4センチの薩摩焼の白薩摩。トーチを持って走る大会マスコットキャラクター「ぐりぶー」と「さくら」が描かれている。公開競技の選手らには1回り小さい記念章が贈られる。いずれもデザインコンペで決まった。



## 森健の現代をみる 精神医療と私たち 今回のゲスト 岡崎伸郎さん



毎日新聞 2018年7月28日  
森健さん（左）と国立病院機構仙台医療センターの岡崎伸郎さん＝東京都千代田区で2018年7月14日、渡部直樹撮影

一昨年7月に起きた「相模原障害者施設殺傷事件」によって、極端な優生思想や精神医療の在り方が注目された。事件から何を学ぶべきなのか。また同分野の医療の現状はどうか。ジャーナリストの森健さんと、国立病院機構仙台医療センター総合精神神経科部長の岡崎伸郎さんが語り合った。

【構成・栗原俊雄、写真・渡部直樹】

障害者の意思尊重 地域で支える共生型に

森 地方紙の連載で、精神疾患の人たちが30～50年と長期間入院していることに驚きました。2004年に厚生労働省がこうした人たちは地域で受け入れる、という方針を示したはずですが。

岡崎 ご本人が「実家に戻りたい」と希望しても多くの壁があります。この十数年で地域移行が順調に進んだとはとても言えない。

森 他の報道では精神疾患で長期入院中の女性が家族と同居を願った際、父親に「重荷だ」と拒絶される場面があり衝撃的でした。

岡崎 精神病床の入院患者は高齢化が進んでいます。およそ30万人のうち、65歳以上が半分を上回っています。また家族も年を取ります。親から代替わりしてきょうだい家が継いだら、なおさら引き取るのは難しい。日本がさまざまな分野で長く寄りかかっていた家族制度が限界に来ているのです。一方、12年に自民党が発表した憲法改正草案では、家族の価値や役割を強調する復古的な内容で驚きました。今や家族だけでなくいろいろな制度によって社会全体で支える方向にかじをきらなければいけないのにな。

森 イタリアは地域移行を打ち出し精神科病院をなくしました。

岡崎 それだけラジカルなことができたのは、元々公立の精神科病院が主体だったことでもあります。一方日本は病床の約9割が民間経営。国の主導による政策転換がしにくい。また「地域での共生」という総論には賛成でも、いざ近所に精神障害者のグループホームが開設されるとなると、反対運動が起きることがある。



森 いまだに地域社会の偏見も根強いのですね。

岡崎 ただ14年、日本は国連の「障害者権利条約」を批准しました。マスコミは注目しませんでした、大きな一歩です。

森 国際条約は「憲法よりは下、しかし国内法より上位」と著作のなかで書かれていますね。何が期待できますか。

岡崎 国を動かす大きな武器になり得ます。たとえば条約第19条には「障害者が、他の者との平等を基礎として、居住地を選択し、及びどこで誰と生活するかを選択する機会を有すること、並びに特定の生活施設で生活する義務を負わない」とあります。これを素直に読めば、入院を続ける必要がなくなったのに、退院先がないために病院にとどまっている「社会的入院」や、病棟をそのまま福祉施設にしてとどまってもらう「病棟転換型居住系施設」は条約に抵触しています。

森 条約に抵触するような施策に公費を投入し続けていいのか、という批判が高まりそうですね。

岡崎 実際、厚労省の検討会が14年、「病棟転換型居住系施設」の在り方についてとりまとめを公表した中には「障害者権利条約に基づく精神障害者の権利擁護の観点も踏まえ」と明記されました。具体的には、病院敷地内に施設を設置する条件として、居住地の選択は精神障害者本人の自由意思によることや、地域社会に参加する機会の確保、プライバシーの尊重などが盛り込まれました。条約効果と言っていいでしょう。

森 そうした中で起きた一昨年7月、障害者施設で19人が殺害された相模原事件では、精神障害者への偏見、障害者たちを事実上隔離している現状など、さまざまな問題が浮き彫りになりましたね。

岡崎 その「津久井やまゆり園」事件は、極端な優生思想の持ち主によるヘイトクライムです。ところが容疑者が精神保健福祉法でいう措置入院＝注<1>＝の経験者だったことから、「精神医療は危険人物を野放しにするな！」などと世論がミスリードされました。しかし極端な優生思想も思想の一つである限り、精神科の治療対象ではありません。過去を振り返ると、精神障害者やその可能性がある人による大事件が起きるたびに、治安対策が精神医療に押しつけられてきました。「何とかしなければ社会が危険だ」という国民感情が高まり、為政者は精神障害者をスケープゴートにする。その結果、異形の制度や法律ができてしまう。ライシャワー事件＝注<2>＝でもそういう波にのまれかけたし、01年の大阪・池田小学校事件を契機として心神喪失者等医療観察法ができました。犯人は結局、心神喪失者ではなかったのに、です。

森 今回の事件でも？

岡崎 不当にも事件の原因が措置入院制度の不備に焦点化され、政府は精神保健福祉法改正をもくろみました。その内容から「精神障害者を治安対策の対象とするのか」との批判が当事者団体などから噴出しました。参院で激論の末に可決。昨年9月の臨時国会で衆



院が解散されたため廃案となりました。先日閉幕した通常国会では出されませんが、今後、再び提出される可能性があります。しかし、犯罪防止策を精神障害者施策や精神医療に押しつけるような法律になることは許せません。

森健さんと話す国立病院機構仙台医療センターの岡崎伸郎さん＝東京都千代田区で2018年7月14日、渡部直樹撮影

#### ■人物略歴

おかざき・のぶお

精神科医。1958年、仙台市生まれ。東北大卒。仙台市精神保健福祉総合センター所長などを経て現職。専門は精神医学、精神病理学。日本精神神経学会理事や日本精神病理学会大会長などを歴任。著書に『星降る震災の夜に』など。

一般市民の心の底に優生思想は潜んでいる

森 精神科医療の現場に対する影響はどうか。

岡崎 戦後、国は精神障害への偏見を助長する政策をとり続けました。その根幹が、社会から隔離して病院に収容することです。近年、当事者団体や関係者らの努力にもよってやっと、隔離収容主義から「地域で支える共生社会型の精神医療」へという流れができてきました。今回の事件でそれが逆戻りすることが懸念されます。社会には冷静になってもらいたいですね。精神障害者で危険な行為に及ぶ人はごく一部ですし、触法行為があったとしても、精神症状との関係が薄いことが多い。無差別殺人のようなことはむしろまれで、長年葛藤のあった家族が被害者になる例が目立つのです。

森 相模原事件の際、被害者の実名が遺族の意向で公表されなかったことに違和感がありました。遺族たちが被害者を施設に長期間預けていたことを知られなくなかったのではないかと。だとしても単純に家族を責めることはできませんが……。

岡崎 知られたくないのは、ごく一般的な国民感情ですよ。精神疾患は統合失調症やうつ病、摂食障害、認知症などさまざまで、その数も膨大です。知的障害も含めると、ほとんどの日本人がそうした障害者の家族や親戚をもっているはずですが。しかしその事実を言えない人が多い。一家の恥だという意識が根強いのです。

優生思想は、なにも特殊な人だけのものではない。一般市民の心の奥底にも潜んでいると思います。そういう普通の市民の価値観や社会的因習が制度にまでなっていくんです。旧優生保護法はその一つ。市民社会に根深く巣くう優生思想をどうやって超克するのか。文明にとっての永遠の課題です。

キーワード

注<1>=精神保健福祉法に基づき、自傷や他害の恐れがある精神障害者を、2人の精神保健指定医の一致した判断により都道府県知事が強制的に入院させる制度

注<2>=1964年、エドウィン・ライシャワー駐日米大使が、精神疾患のある少年に刃物で刺されて負傷した事件。

対談を聞いて



「冷静になってほしい」。相模原事件について、岡崎さんがそう話したのが印象に残った。凶悪事件が起きると、分かりやすい理由、速効性がありそうな対策が求められる。その結果、報道や世論があらぬ方向に行く恐れがある。ライシャワー事件はその典型だ。さらに政治や行政が世論の期待を理由に、市民の人権を犠牲にしかねない。再発を防ぐために何をすべきなのか、じっくり考えたい。

森健さん

#### ■人物略歴

もり・けん

ジャーナリスト、1968年生まれ。早稲田大卒。在学中からライターを務めた。2012年『「つなみ」の子どもたち』で大宅壮一ノンフィクション賞、17年には『小倉昌男祈りと経営』で大宅壮一メモリアル日本ノンフィクション大賞受賞。



#### 相模原殺傷事件2年 150人が追悼集会

大阪日日新聞 2018年7月28日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺された事件から2年となる26日夜、追悼集会が大阪市北区で開かれた。事件を風化させてはいけないと有志約150人が集まり、街頭で「差別は許さない」と呼び掛けた。

事件を風化させまいと声を上げる参加者ら＝26日夜、大阪市北区

同集会は、大阪を拠点に活動する劇団「態変」の主宰者で、自身も身体に障害のある金満里さんの呼び掛けで実施。一昨年9月と、事件発生から1年となった昨年7月に続き、3回目の“アクション”になった。

ヨドバシカメラ梅田店前に集まった参加者らは、「共に生きよう」「19人の名前と尊厳を奪うな」と書かれたプラカードを手に黙とう。個々にスピーチを行った後、「命の重さはみんな同じだ」と声を合わせた。

金さんは、被害者が匿名扱いになっている点について「殺されてもまだ葬りさられる、なかったものとして扱う差別を感じる」と憤りをあらわにし、「これは障害者の問題ではなく社会のあり方の問題であり、みんながわがこととして考えてほしい」と訴えた。

**やまゆり園 利用者との意思疎通 「指筆談」広がり兆し** 毎日新聞 2018年7月28日  
外出中の車内で入所者の手を握って指筆談をする職員＝津久井やまゆり園提供



横浜市内に仮園舎を置く障害者施設「津久井やまゆり園」で、重い障害がある利用者との意思疎通を問い直す動きが出ている。職員の一人は、利用者が動かす指やペンの僅かな動きを手を添えて通訳する「筆談」に可能性を見いだす。筆談を支援の枠組みに取り入れる動きはまだないが、園内では活動に共感も広がっている。

6月、利用者とグループホーム（GH）の見学に行った帰りのバスの車中、ある女性職員は女性利用者の隣に座り、優しく手を引き寄せた。「（GHの）イメージが変わった。いい印象でした」。利用者の指がたどる筆跡を手のひらに感じた。見学は今後の暮らしのあり方を決めていく「意思決定支援」の一環でもあった。

女性職員が試したのは「指筆談」と呼ばれる手法で、取り組んで4年ほどになる。国学院大の柴田保之教授が当事者同士の指筆談による交流会を開いていることを知り、園の利用者や職員と一緒に参加した。

柴田教授が重度障害を抱える人たちの手を取り、雄弁に通訳をしていく。同行した利用者は当初、部屋にも入りたがらなかったが、指筆談で「思いをくみ取ってくれるんだ」と通訳され、状態も落ち着いていった。女性職員は「頭が大混乱。衝撃だった」と話す。

筆談や指筆談には、科学的根拠に乏しいと批判する声もある。女性職員も懐疑的だったが、集中的に習い始めた。最初は「あ」の書き方から始まり、平仮名を理解すると、今度は「いちご」「みかん」など選択肢を増やした。手のひらに集中させる作業に神経をすり減らす日々。1カ月目には白紙の状態から単語を理解できる手応えを得た。

不安もあるが、支援の姿勢が変わったと感じている。利用者に語りかけることが自然と増え、僅かな表情や視線にも注目するようになった。ある利用者の手を取ると、「自分は嫌われているのかも」と、手のひらでうち明けてくれた。「そんなことはないよ!」。大きな誤解だった。忘れかけていたごく当たり前の意思疎通を取り戻した気がした。

昨秋、同じく指筆談に取り組む同僚と、園職員を前に共同発表した。タイトルは『「言えない気持ち」に手を添える』。「利用者は私たちを見ている」と伝えたかった。

発表を聞いた入倉かおる園長は、支援のあり方を考えさせられたという。自らもGHで暮らす寡黙な利用者や、絵や文字を通じて交流を続けている。入倉さんは「利用者の気持ちをどうくみ取るか、職員は地道に取り組んでいる」と話す。【堀和彦】



淡々とした文章に傷の深さがにじんでいた。知的障害などを理由に不妊手術を認めていた旧優生保護法の下での強制不妊手術問題にからみ、重度の難聴という読者の女性（50代）からメールが届いた。

昔、と言っても「まだ20年もたっていない」頃、ある食事会で、隣にいた50代くらいの男性から大声で「障害者は子どもを産むな」と言われたそうだ。10人以上いた参加者の中で障害者は自分だけ。場が静まりかえった。「怒りがこみ上げ、顔が変わったのが自分で分かりました」「悔しかったです。悲しかったです」「言葉の暴力は今もあります。（その傷が）消えるのは死ぬときでしょう」「人はまず偏見から始まり理解は最後なんだと思っています」ー。

命に優劣をつけ、障害者は生まれてこない方がいいと考える優生思想が平然と人前で語られたことに、彼女は、深く傷つき、そんな風潮にあらがい、覆す道のりの陰しさに今も途方に暮れているのだ。

そうした思想が文字通り「刃（やいば）」となったのか。重い知的障害のある入所者19人が刺殺された相模原市の障害者施設殺傷事件から26日で丸2年がたった。殺人罪などで起訴された元施設職員は、今なお「意思疎通できない人たちを刺した」「重度障害者など生きている価値がない」ーなどと主張しているという。

亡くなった人たちの身元は明かされず、遺族の大半が沈黙を続ける。心身の障害そのものによる生きづらさだけでなく、障害があること自体に社会から無言で向けられる冷ややかな視線。障害のある人の家族たちも、この二重の苦しみに耐えている。

そもそも、発達障害など外見からはそれと分かりにくい人もいる。医療の進歩に伴い自宅で暮らす重い障害のある子どもも増えている。関係者の努力で少しずつ理解は広がっているが、当事者と日常的に接する機会がある人は、まだ、そう多くないだろう。

だから、せめて、まず想像してほしい。職場の同僚や友人、あるいは電車やバスで偶然隣り合わせた人が、実は障害に苦しんでいたり、障害のある家族がいたりするかもしれない。不自由さや介護に携わる苦労はもちろん、それを周りに打ち明けられず、陰で息をついているかもしれない。障害のある人、ない人が「ともに生きる」社会は、そこから始まるのだと思う。

私も、重症心身障害児の父である。

▼みやけ・だいすけ 長崎県出身、九州大卒。1994年入社。佐賀総局、玖珠支局長、東京報道部、社会部、都市圏総局を経て生活特報部の編集委員

## 障害者施設で不審者侵入対応訓練 滋賀・殺傷事件受け 京都新聞 2018年07月28日



訓練で、さすまたを手に不審者を押しとどめる職員たち（高島市マキノ町・藤美寮）

滋賀県高島市マキノ町西浜の障害者支援施設「藤美寮」で、施設内に侵入した不審者への対応訓練がこのほど行われ、職員たちが万一の場合にとるべき行動を学んだ。

2年前の神奈川県相模原市の施設での殺傷事件を受け、高島署が毎年実施している。今回は約80人が参加し、訓練の流れなどの事前説明なしに、より実践的な形式で行った。

訓練では、不審者役の署員が声を掛けた職員に切りつけ、施設内に侵入。職員たちは利用者を避難させつつ、ソファなどでバリケードを築き、装備品のさすまたで不審者の動きを止めた。

講評で、署員は職員に対し、声かけなど初動の重要性を強調。杉原清美施設長は「おかしいと思ったら、すぐに通報できるようにしたい」と話した。

## 手をつなぐ育成会全道大会、苫小牧で開幕 知的障害者や家族、支援者ら800人参加



苫小牧民報 2018年7月28日  
軍手をはめた状態で袋から折り紙を取り出し、障害者の感覚を疑似体験する参加者＝28日午前11時15分ごろ、苫小牧市民会館

知的障害者や家族、支援者などで作る全道組織、北海道手をつなぐ育成会（事務局札幌市）の全道大会が28日、苫小牧市内で開幕した。2日間にわたって全道各地から集まった約800人の参加者が分科会や講演などを通じて、障害者が安心して暮らせる地域の在り方について考える。初日は発達支援や高齢化問題など五つのテーマごとに

分科会を行った。

道手をつなぐ育成会、苫小牧市手をつなぐ育成会などの主催。全道大会は毎年、道内で開催地を変えながら開いており、63回目。市内での開催は31年ぶりとなる。

参加者約800人のうち、約250人が障害を持つ人。会員以外にも2日間にわたって延べ約350人の市民から申し込みを受けているという。

28日午前は市民会館と医師会館で▽発達・教育▽就労・日中活動▽暮らす▽高齢▽育成会活動—のテーマごとに分科会を行った。

このうち、市民会館での第1分科会（発達・教育）には市民を含め約140人が参加。札幌市の手をつなぐ育成会有志らでつくる「啓発キャラバン隊Team I（チーム・あい）」のメンバーを講師に、発達障害がある人の物の見え方や感じ方などを参加者が疑似体験するワークショップを織り交ぜたプログラムを展開した。

ワークショップでは、軍手をはめた状態で袋の中から折り紙を制限時間内に取り出したり、視界を狭める道具を使ってスクリーンに映し出された絵の中から指定の物を探すといった体験が用意された。参加者は思い通りにいかない上、司会者から「早く、早く」とせかされて困惑の表情。発達に障害がある人の中には指先をうまく使えなかったり、視野を広く持てない人もいることを学んだ。

主任児童委員を務める、苫小牧市矢代町の小玉つたゑさん（63）は「相手を理解しようという姿勢で、見守ることの大切さを知った」と語った。

同日午後からは、分科会ごとのシンポジウムなどを実施。市民活動センターでは、約1000人の障害者が参加する「本人大会」が行われた。

大会2日目は市民会館大ホールで全体会を予定。札幌市の児童精神医・臨床心理士の田中康雄氏による記念講演のほか、「本人大会宣言」や大会宣言決議などを行い、2日間の研修成果をまとめる。

地元大会の準備、運営を担ってきた苫小牧市手をつなぐ育成会の斎藤フミ子会長は「障害について理解をより深められるような有意義な大会にしたい」と話した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行